

村上龍

ベコイ
ンロ
ズツ
カ！
下

村上
龍

イン
ロック
カ！

イ
ビーズ
下

講談社

コインロッカー・ベイビーズ(下)

一九八〇年一〇月二八日 第一刷発行

著者——村上龍

© Ryu Murakami 1980, Printed in Japan



発行者——野間省一

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京区一五五—二二(大代表) 振替東京区一五言

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——株式会社堅省堂

定価——八八〇円

落し本・乱丁本はおとりかえいたします。

コインロッカー・ベイビーズ

(下)

カ
ー
装
画
小
山
佐
敏

アネモネは荷物の整理を終えると最後の薄焼き卵を作った。一枚だけ残しておいた皿に移しフォークで裂いて口に運ぶ。あれから何十枚薄焼き卵を作っただろうか、俺が戻って来るまで開けるな、そう言ったキクとの約束を破ってクリスマスプレゼントの包みを解いた夜以来、ずっと毎日卵ばかり焼いていた。

アネモネは警察に七回呼ばれた。あいつは拳銃をどうやって手に入れたか言わなかったか？

あいつはクリスマススイブの夜君の部屋を出る時拳銃は持っていたか？ 何をしに行くと言って部屋を出たのか？ 誰かを殺すと言ってなかったか？ あいつは部屋を出るまで君の部屋で何をしていたんだ？ 君とあいつはいつ知り合った？ どういう関係だ？ 寝たか？ 君は幾つだ？ 君

の名前は？ アネモネというのは本名か？ アネモネは一言も口を開かなかった。しかし取り調べはそんなに苦痛ではなかった。警察官は同情的でアネモネが悲しそうに微笑むとすぐに質問を変えた。それにアネモネはそれほど重要な証言者ではなかった。

ミスターDに雇われた弁護士が何度も訪ねてきて裁判で証言してくれるように頼んだ。ねえアネモネさん桑山橋男はこう言ってます、キクはきつと僕を救おうとしたのだろう、テレビの前で母親と会わされる僕を救い出そうとしたのだと思う、と言ってるんです、あなたはどうか考えます？ そのようなことをキクは言ってませんでしたか？ ハシを助けに行くんだ、キクがそういうのを聞きませんでしたか？ 聞いた、というあなたの証言があれば桑山菊之はとても有利になります。アネモネは拒否した。理由は？ と聞かれて、裁判が嫌い、と答えた。キクは二日間精神病院に収容されていたそうだ、病院で脳の手術でもやられたのかと裁判の日思った。

法廷に現れたキクは落ち着きがなく周囲をキョロキョロと見回し怯えきっていた。太って、目に光がなく背を丸くしておどおどあたりを窺っていた。アネモネは目立たないよう地味な服装と化粧で傍聴席の隅にいた。検事が起訴状を朗読する。銃砲不法所持、脅迫、器物破損、傷害、殺人。キクは廷吏に何か話しかけようとして裁判長から注意された。静かにして、起訴状の内容をよく聞くように、そう言われただけでキクは縮み上がった。

事件直後、キクはすっかり有名になった。未成年だったので名前も顔写真も伏せられたが、キクはテレビの実況放送中に散弾拳銃を発砲したのである。キクは十三分間テレビの画面に大写しになり、アナウンサーは、兄弟としてハシと共に育てられた棒高跳び選手の桑山菊之君です、と

叫び続けていた。キクは実況放送中に人を殺した世界最初の少年Aだったのだ。キクは有名になり、ハシのレコードはそれから一ヵ月爆発的に売れた。

裁判は、事件直後の恐るべき反響が幾分収まった頃始められた。キクが起訴状を全面的に認めたので法廷はざわめいた。弁護士が慌てて駆け寄り、殺人の意志を否定するように説得した。キクはしばらく首を振っていたがやがて面倒臭そうに立ち上がり、殺人の意志はありませんでした、と本を読むような口調で言った。傍聴席も弁護士も裁判官も、検事さえもその発言に安心した様子だった。

弁護側の証人喚問は三日間続いた。弁護士は、殺人の意志を否定し残る罪状についてはすべて認め、最愛の友人であり兄弟として育てられたハシがテレビで見せ物になるのを見るに忍びず止むに止まれぬ気持ちで脅迫、傷害等を犯したと強調し、情状酌量を狙って各証人から証言を引き出した。その見解はこれまでの報道の論調とほぼ同じで、キクはみんなから同情されていたのである。島から出て来た桑山や乳児院のシスターは、二人がいかに分かち難く結ばれていたかを話し傍聴人の涙を誘った。ミスターDは、私が一番悪い奴です、罰せられるべきは私です、と静かに話し、ハシの出生を売り物にしてレコードを売ろうと思っていたのだと正直に証言した。それは人間の考えることやないかも知れませんが、私ら関西の人間は鬼います、私は鬼みたいなことを考えとったんです、レコードの売り上げしか考えんと本当に残酷なことを平気で進めた、人の苦しみを玩具にして見せ物にする、仲よう育った被告が怒ってハシを救いに来たのは当然や思います。

キクは、散弾拳銃の出所も自供していた。タツオ・デラ・クルーズというフィリピン人から預かったものと、ハシが確認の証言をした。弁護士は最後に検死医を呼び、沼田君枝の頭蓋骨の弾痕について報告を聞いた。弾痕の角度を検討すると、発砲時に、銃身は十四度以上二十八度以内の角度で水平より上向きであったはずだ、と検死医は証言した。つまりキクは激情の余り空に向けて撃ったのである。その銃口の前に、背の高い沼田君枝が顔を出した、従ってキクには殺意はなかった、銃口を上方に向けていたのであるから周囲のカメラマン達を狙ったものではない、事故だ、これが弁護士の結果論だった。検死医が、被害者の頭蓋骨レントゲン写真を示して説明するうちにキクは苦しそうに身を振って震え始めた。顔面とか散弾とかの言葉を聞く度に耳を押さえ目を硬く閉じていたがついに泣き出した。裁判長の指示で検死医は証言を中断し三十分の閉廷となった。キクは廷吏に連れ出された。背中を丸め女のような手つきで顔を押さええて。法廷内のすべての人々は、キクがどれほど良心の呵責に苦しんでいるか知ることができたわけだ。検事は反対尋問においてキクの殺意を立証しようとは思っていないように見えた。弁護士側証人の証言の転覆を意図せず、当事者の反省を促すにとどめているようだった。検事の証人喚問は半日で終わった。キクが所持していた散弾拳銃は十分な殺傷能力があることを立証しただけだった。キクも含めてすべての人が裁判に安心し満足しているようだった。アネモネを除いて。

最終弁論、この事件の文学的な側面に言及することは危険でありましょう、私はそれを承知しております、人間の過去と心理が織り成す背後の物語に目を奪われることなく法は冷厳に適用されるべきです、しかし法の存在理由が人間の生命の尊厳にあるとする時、私は、私達が構成する

社会そのものが持つ罪を意識せざるを得ません、十七年前、コインロッカーに遺棄された被告は間違いなく被害者でした、もちろんそのことは当件における被告の立場に何らの正当性を与えるものではありません、しかし、被告の当件における一連の行動は、被害者としての恥辱や苦痛を共有する戸籍上の弟の窮状を見るに忍びないという理由に発するものであることは明らかであります、被告は人命の尊厳を汚す目的で発砲したのではないのです。

最終論告、当件は、事件の特殊性ではなく、犯罪の本質を判断しなければならないという裁判の基盤を問わるる審理でありました、私達は被告の罪が被告の過去によって贖^{あな}うことができないことをここに示さなくてはなりません、しかし、人間の恥部を覗く欲求を満足させて何がしかの利益を得ようとする行為がしばしば許されざる犯罪の接ぎ木となることの警鐘として当件を捉えることに對しては本官も異論はありません。

判決公判の日もキクの態度は変わらなかった。おどおどして力のない目で周囲を眺め背中を丸めて小刻みに震えていた。判決主文、銃砲不法所持、脅迫、器物破損、傷害に關していずれも有罪、殺人に關してその意志の無かったことを認めるも過失致死の罪は免れ得ない、よって被告に五年の懲役刑を科する。人々は立ち上がった。ミスターDと弁護士は握手した。検事は苦笑していかにかこの裁判がやりにくかったかを回りに示した。ハシはニヴァと抱き合っていた。ニヴァはハシの髪を撫でながら、三年で出れるわよ、と慰めている。彼が出て来たら一緒に住んでもいいわハシ。キクは背中を丸めたまま廷吏に腕をとられて法廷を出ようとしていた。アネモネは喉がムズムズした。最初は法廷内の空気が悪いせいだと思いきさな咳払いをして喉に詰まった異物感を

取り除くつもりだった。唇を開き手の指を軽く首に当てて歯と舌に力を込め異物を引き摺り出そうとした。ムズムズする塊は喉を出る時に脹れ上がり、咳払いではなく、かん高い叫び声となつて唾と共に弾けた。

「キク！」

アネモネは傍聴席から身を乗り出し被っていた白いベレー帽を振って、叫んでいた。

「ダチュラを忘れたの？ ダチュラよ！ あんた、こんなのに騙されちゃだめよ！」

真白のスーツと長靴、ネオン管織りのバラの胸飾り、頭に貼りついて渦を作る短い髪は先端だけが染料で輝やき、完璧な化粧の人形のようなアネモネに、退廷を急いでいた人々は一斉に注目した。キクはゆっくりと振り向いた。ダチュラという言葉聞いた時ピクリと肩を震わせた。

「まだ何にも終わっていないのよ！ キク！」

キクは一度だけアネモネに笑いかけた。笑いかけた時にだけ背中を伸ばした。やがて廷吏に促されると再び溺死の猫のような背に戻り出口から姿を消した。クリスマスパーティー用の黒いスーツを着たままだった。鉤は取れ肘や膝が擦り切れて光り、袖は破れて糸が何本か垂れ下がっていた。キクの後姿が見えなくなるとアネモネは周囲を無視して出口に向かった。キクはすぐ苦しんでるっていうのに、ハシの声が背後で聞こえた。アネモネは出口で振り返り一人一人を順番に睨みつけニヴァの瘦せた頬に視線を止めた。

「あんたらみんな、いつか鰐に食わせてやるわ」

その夜にアネモネはキクのクリスマスプレゼントを解いたのだった。プレゼントは本でオムレ

ッその全て、というものだった。一八二ページにオムライスの作り方が載っていた。キクはその部分を赤い線で囲んでいた。アネモネは卵を二百個買ってきてオムライスを作り始めた。足りなくなった材料を補充して行く以外はずっと部屋に閉じこもり起きてから寝るまでオムライスを作り続けた。部屋は卵だらけになった。アネモネはベッドを除いて部屋の床の全てを薄焼き卵とケチャップ御飯で埋め、それを眺め回してバカみたいと呟き短い間声を出して笑い、やがて全身が痙攣するまで泣いた。

泣き止めるとベッドに一番近い皿を取って壁に貼ったカラギ島の海図に投げつけた。陶器が割れる音でキクの裸を思い出した。筋肉の上に薄い紙を貼りつけたようなキクの裸。ひよっとしたらあの裸に触れることはできなくなったのかも知れない、そんな恐怖に捉われた。体が震えてまた泣きそうになった。もう涙は残ってないだろうから狂うかも知れないと考えた。下着を脱いでいつもキクがやってくれたように指を尻の間に当てた。指が冷たかった。尻は溝の奥まで鳥肌で埋まっていた。アネモネは尖った爪を尻の肉に突き立てた。体の震えが止まるまで長いことそうしていた。やがて尻の溝をヌルヌルしたものが流れ始めた。アネモネは爪の先を滑らせ脱ぎ捨てたナイロンの短いストッキングを摘んで尻の溝に押し当てゆっくりと動かした。キクの性器の形を思い描こうとした。ナイロンと陰毛と酸っぱい液体が擦れ合う音を聞きながら、水煮のアスパラガスそっくりだとも思ったキクの性器を思い出そうとした。うまくいかなかった。アスパラガスそのものが頭に浮かんだり、一緒に入った風呂で見せてくれた父親の性器が目の裏側に現れたりした。アネモネはキクが服を脱ぐところから始めて胸の中央に生えている長い毛や臍へそのあ

たりの深い皺や脇腹にある盛り上がった傷跡や足の甲にできたスパイクの胼胝^{たじ}を思い出すのに成功した。そして股の間を手探りしている時、突然キクの顔をすっかり忘れてしまっているのに気付いて叫び声を上げベッドから跳ね起きた。股にナイロンストッキングを挟んだまま床のケチャップ御飯を踏みつけながら部屋を横切りキクの写真が納めてある額を手にとった。アネモネは三十秒間その写真を眺めた。キクのところへ行こう、と決めた。

翌日マンションを売った。宝石からテニスのラケットまで持ち物をほとんど処分した。七つの銀行に分け、合計すると二億を少し超える金額の普通預金口座を持った。両親にはロンドンに行くと言った。モデルクラブの事務所に電話し、あと四ヵ月残っている契約期間を破棄するので来月貰うことになっている昨年度下半期のギャラを違約金にしてくれと頼んだ。事務所は了承してくれた。そして今、すべての荷作りが終わり最後の薄焼き卵を食べた。車の荷台を改造して鰐を載せた。大分迷ったが連れていくことにした。ガリバーは窮屈そうに尻尾を曲げて簡易水槽に沈んでいる。十時間辛抱するのよガリバー、そしたらキクに会えるからあなたも会いたいでしょ？ 最小限の衣類と二人分の潜水器材を積み込み、アネモネは午前三時にフォードブロンコで出発した。

東北自動車道を北上する。終点まで行って狭い海峡を渡ればキクがいる町に着く。函館という港町。アネモネは踵の無い中国靴を履いている。赤い縹子の布地に金色の糸で白菜畑が刺繍してある。アネモネはその中国靴で一定の深さにアクセルを踏み込んでいる。毎分四千五百回転、ブロンコは時速百三十キロで走り続ける。アネモネは口笛を吹いている。東京から離れていくのだ

という実感が無い。東京は、そのすべての窓の灯りは、アネモネが着ているラメのシャツの表面で光る繊維の粒となって、依然として彼女の背中に貼り付いている。

アネモネは旅行が嫌いだ。これまでに一度しかしたことがない。中学校の修学旅行だけだ。三泊四日で関西の古都を回った。最初の宿泊地でアネモネは一睡もせず普段の三倍も喋り三倍の量の食事をした。二日目、三日目とバスの中では寝てばかりいた。古い建物や庭を巡ったはずだがあまり記憶にない。ただ場所を移動したことを、全身が、憶えている。座席に凭^{もた}れて眠り続け、震動や音で鈍く目覚め、うつすらと目を開けると、窓の外の景色が必ず変わっていた。いつの間にか陽が沈んで遠くに灯りが点いたりしていた。自分は旅行している、そう思った。そんな風に思ったのはその時が初めてで、それから後も一度もない。窓の景色を変えるためだけに場所を移動するのが旅行で、アネモネは嫌いだ。

アクセルを踏み続ける。ヘッドライトで切り取られる闇は一瞬静止してから次に恐しい速さで後に飛んでいく。灰色の道路が曲線を描いて延びている方向が微かに明るくなった。もうすぐ夜が明ける。アネモネは、給油と食事のため休息をとることにした。フォードブロンコをサービスイリアに入れる。車を止め運転席の横に置いた冷凍箱から馬肉の塊を取り出した。密閉した荷台を覗き、肉を放り投げてからアネモネは食堂へ歩いた。先端だけを染めた髪と銀狐のコートと黒のレザーパンツと中国靴が長距離トラックの運転手達の注意を引いた。注文したカレーライスと蜆の味噌汁が運ばれて来るまで手と顔を洗おうと思った。席を立てトイレに向かうアネモネの細い腰を、飯を掻き込んでいた男達が一斉に見上げた。

トイレは調理場の奥にあった。掃除したばかりらしくて床が濡れている。暖房が届いてないので息が白く濁る。鏡は割れていた。水は冷たくて気持ち良かった。調理場の湯気が扉の隙間から流れて来る。湯気にはキャベツの匂いが混じっている。

突然女性用ボックスの戸が開いて男が二人転がるように出て来た。一人は下半身裸でガタガタ震え、頼むよ止めてくれよ、と呟いている。もう一人は右手に注射器を持ち大声で笑っていた。二人はアネモネに気付いて顔色を変えた。あ、女だ、下半身裸の男は濡れた床に尻をつけて転がり両手で股間を隠した。男は猛烈に勃起していた。男は扉のすぐ前に尻をついていたのでアネモネは外に出ることができなかった。注射器の男は蛇皮の背広にベレー帽を被り乗馬ズボンに地下足袋を履いている。背は低いが肩の肉は盛り上がり首は太く手足や顔が大きかった。アネモネに気付いて短い間笑うのを止めたが、勃起した男が慌ててブリーフを穿きワイシャツの裾を引っ張って性器を隠そうとしているのを見て再び大声で笑い始めた。なあ頼む、女の前で笑わないでくれ俺を笑いものにしないでくれ。勃起した男は黄色いズボンとピンクの靴下と黒皮の編み上げ長靴を急いで着けた。靴下は踵が破れている。アネモネが見ているのに気付くと恥ずかしそうに下を向いた。注射器を持った男よりさらに背が低い。アネモネの唇より低い。三十歳前後の顔をしているが頭の真中あたりが禿げている。それでも櫛を入れ数少ない髪をポマードで光らせて七三に分けていた。ねえお嬢さん俺は生まれつき胃腸が悪いんだ。男は生牡蠣のような目をしていった。ねえお嬢さん胃腸が弱いのは生まれつきなんだよ。濡れた床に転がっていたのでズボンのあちこちに染みが出来ている。胃腸が弱いものでね、子供の頃から磁気の針をお尻に入れてたんだ

枚のくせに体中汗を掻いている。アネモネは男の脇を擦り抜けてトイレを出ようとした。ねえお嬢さん待ってくれ、おとついかからおばあちゃんの具合が悪いんだ死にそうなんだ、それでも俺は仕事を休むわけにはいなくて、だから韓国産のビタミン注射をして働いてる、俺は、偉いだろ？　なあ、偉いと思わないか？　禿げた男はアネモネの腕を掴んで大声を出した。俺は偉いだろ？　アネモネは強く掴まれた腕を振り切ろうとした。窓の外を見ている男を見て、何とかしてよ、と声をかけた。

ベレー帽を被った筋肉質の男はいやな顔をして禿げた男を眺め首を振って舌打ちした。いい加減にしろよ、みっともねえぞ。あんた、とアネモネに向かって言う。あんたこいつを黙らせて欲しいかい？　アネモネは頷いた。するといきなり禿げの男に殴りかかった。アネモネの目の前を大きな拳が唸りを上げて通り過ぎ禿げの男の鼻に当たった。鈍い音がした。禿げの男は鼻を押さえて崩れ落ちた。膝を曲げてトイレの床にべったり坐り目を大きく開いている。しばらくして鮮血が滴り出した。

アネモネはトイレを出た。本当にいやな気分になった。禿げを殴った男は後を追ってきた。並んで歩きながらアネモネに話しかける。よお、礼を言ってくれよ。アネモネは無視して席に戻った。カレーライスは冷えていて食べる気になれなかった。味噌汁を一口だけ飲んだ。筋肉質の男は隣の椅子に坐った。なあねえちゃん俺に礼を言えよ。前歯に金を埋めている。フェラチオする外人女を描いた首飾りをしている。それをアネモネの目の前で揺らした。殴ってやったんだ、礼を言え。周囲の男達がニヤニヤ笑って注目している。アネモネはハンドバッグから千円札を二枚